

浮気妻の制裁

第一卷 浮気の代償

海老沢 薫 著

## 内容

■ 著作権について

■ まえがき

■ 第一章 24歳の倦怠期

■ 海老沢薫 BLOG

<http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/>

・ ・ ・ 「羞恥」 「露出」 「辱め」 をテーマとした小説シリーズや、各種コンテンツ情報などを配信。

■ 著作権について

「浮気妻の制裁 第一巻 浮気の代償」(以下本書と表記する)の著作権は「海老沢薫」にあります。

・本書のすべての内容は、日本の著作権法、及び国際条約によって保護されています。

・「海老沢薫」が事前に書面をもって許可した場合を除き、本書の一部、または全部を、

あらゆるデータ蓄積手段(印刷物、電子ファイル、ビデオ、テープレコーダ)により複製、

流用、転載、転売することを固く禁じます。

・著作権の侵害につきましては、著作権法第61条などの罰則がありますのでご注意ください

い。

■ まえがき

二十四歳の若妻、白石萌々は職場の上司だった。和之とは二十三歳も歳が離れていたが、幼い頃に父親を亡くし母子家庭で育った萌々は、ずっと父性というものに憧れ、父親ほど歳の離れた和之に対してそれを見出し、自分の何にもかもを包み込んでくれるような大人の優しさに惹かれたのだった。

しかし、結婚生活が始まると理想は脆くも崩れ去ることになった。夫の和之は仕事に忙殺され、なかなか自分の事をかまってくれない。夫に対して萌々は次第に不満を募らせていったのだ。

萌々は身も心も満たされない結婚生活を送る中で、抑えきれなくなってきた感情のはけ口を求め、ようになり、アプリを通じて出会った男達と禁断の恋を重ねるようになる。最初はそうした行為に罪悪感を抱いていた萌々であったが、すべては自分に無関心な夫

が悪いのだと決めつけ、その場限りの恋愛関係にのめり込んでいった。そうして、萌々はアプリで知り合った男を平日の昼間に夫と暮らす自宅マンションに呼んで不貞行為を繰り返すようになり……。そんなある日、萌々が男と裸で戯れていると、もつと刺激的な体験を求めたい男が萌々を裸のままベランダに連れ出し、そこで若妻の体を弄んだのだった。萌々は白昼のマンションのベランダで初めて「ああん、気持ち良いわ……。ああん」味わう刺激的な快楽に、大きな喘ぎ声を上げて悶え狂った。暫くして、ベランダで断末魔の喘ぎ声を届けた男は萌々を一人ベランダに残したまま部屋を出て行き、若妻は素っ裸のままベランダで快感の余韻に浸った。え……。萌々はその音に驚き、慌てて部屋

だぬ 萌々 いた き い る フ 出 白 が を ぐ 封 け こと に  
ま事 々 な た 脅 開 ア 思 さ 昼 格 確 に 筒 を こと 入  
も態 々 な た 脅 開 ア 思 さ 昼 格 確 に 筒 を こと 入  
ない 態 々 な た 脅 開 ア 思 さ 昼 格 確 に 筒 を こと 入  
い 態 々 な た 脅 開 ア 思 さ 昼 昼 格 確 に 筒 を こと 入  
自 態 々 な た 脅 開 ア 思 さ 昼 昼 格 確 に 筒 を こと 入  
分 の 態 々 な た 脅 開 ア 思 さ 昼 昼 格 確 に 筒 を こと 入  
の 態 々 な た 脅 開 ア 思 さ 昼 昼 格 確 に 筒 を こと 入  
人 態 々 な た 脅 開 ア 思 さ 昼 昼 格 確 に 筒 を こと 入  
生 態 々 な た 脅 開 ア 思 さ 昼 昼 格 確 に 筒 を こと 入  
を 態 々 な た 脅 開 ア 思 さ 昼 昼 格 確 に 筒 を こと 入  
守 態 々 な た 脅 開 ア 思 さ 昼 昼 格 確 に 筒 を こと 入  
り 態 々 な た 脅 開 ア 思 さ 昼 昼 格 確 に 筒 を こと 入  
抜 態 々 な た 脅 開 ア 思 さ 昼 昼 格 確 に 筒 を こと 入  
く 態 々 な た 脅 開 ア 思 さ 昼 昼 格 確 に 筒 を こと 入  
た 態 々 な た 脅 開 ア 思 さ 昼 昼 格 確 に 筒 を こと 入  
め 態 々 な た 脅 開 ア 思 さ 昼 昼 格 確 に 筒 を こと 入  
に 態 々 な た 脅 開 ア 思 さ 昼 昼 格 確 に 筒 を こと 入  
、 態 々 な た 脅 開 ア 思 さ 昼 昼 格 確 に 筒 を こと 入  
隣 態 々 な た 脅 開 ア 思 さ 昼 昼 格 確 に 筒 を こと 入

家の住人の屈辱的な命令に従う覚悟を決めるのだった。

開け放たれた窓から部屋の中に初夏の爽やかな風が吹き抜けた。次の瞬間、閉じたカーテンが揺れ、外の眩しい光がまるで閃光のようになり暗がりの部屋を照らし出した。部屋の白昼からベッドの上で男と戯れる萌々は、部屋の中に差し込んだ光に思わずドキッとして男の体から手を離した。「ごめんなさい、今日はもう帰って」と、男は少し苦笑いしてベッドから起き上がると、裸の体に服を纏っていった。瞬間の光が差し込んだ時、萌々の心に罪悪感が過ったのかも知れなかった。平日の昼間に自宅の寝室で夫ではない男と性行為に興じているという罪悪感、夫ではない男の手で感じてもらっているという背徳感、二十四歳の若



妻、萌々の心の中にはどうやらまだそうした感情が少なからず残っているようだった。男が帰った後の部屋で萌々は一人ポツとスマホを眺めていた。アプリ画面に映し出される男達の顔写真とプロフィールを次々と見つめながら、新たな相手を物色していたのだ。それは決して許されぬ恋の相手であり、夫のくれない快樂や刺激を与えてくれる男たちを眺めあつた。画面上に次々と現れる男たちを眺めていると、萌々の好奇心はくすぐられ、同時に体が無性に疼くのを感じた。

萌々はおよそ半年前の昨年末に結婚したばかりだった。夫の和之は萌々より二十三歳上の四十七歳で、職場の上司と部下という関係で知り合った職場結婚であった。四歳上の姉と母子家庭で育ってきたため、いつも心の片隅で父性というものに強い憧れを抱いていた。

そうして、社会人となって就職した会社で出会った上司である和之の、父親のように自分のことを優しく受け止めてくれる大人の包容力に曳かれ、それが二十歳以上も年の離れた恋愛に発展していったのだった。

周りの同僚たちは、若くて美しい萌芽が四十七歳のオジサン上司と結婚したことには驚き意外な歳の差カップルに対して様々な憶測が飛び交った。一見優しそうに見える和之が部下の萌芽を脅迫して無理やり結婚させたのではないか、萌芽は金が目当てで結婚したのではないか、実は二人は体の相性が抜群に良かったのでは、職場の同僚たちはそう思ったのでは、面白おかしく囁き合い、一見不釣り合いにしか見えないうカップルを好奇に満ちた目で眺め揶揄した。

惹かれた萌芽からの熱烈なアプローチによって二人の恋は始まり結婚のプロポーズをしたのも和之ではなく、当初、上司の和之は二回

り近く歳の離れた萌々と結婚することに強い  
抵抗を抱いており、結婚をなかなか決めてく  
れない上司の和之に対して萌々は何度も何度  
も猛烈なアプローチを続けた。  
四十七歳の和之はバツイチ独身で、別れた  
妻との間には萌々と同じ歳の娘もいた。一度  
結婚に失敗していることもあり、娘と同じ歳  
の部下との再婚に二の足を踏むのは男として  
当然の事なのかも知れなかった。  
それでも、結局最後は萌々の熱意が実る形  
で歳の差カップルは無事結婚し、萌々は会社  
を辞めて専業主婦になった。ずっと憧れ続け  
ていた父性を持つ和之との結婚、それは萌々  
にとつて幸せな結婚生活をもたらしてくる  
はずだった。  
しかし、現実はそのうはならなかった。結婚  
生活が始まって一か月が過ぎた頃から、二人  
の間には少しずつ隙間風が吹くようになって  
のだ。理由はやはり二十三歳もの年齢差から  
くる感性の違いが大きかった。二十四歳の

萌々は毎晩のようにベッドの上で体の交わりを求めたが、一方の和之は最初のうちこそそれに応えようとしていたが、すぐに体がもたなくなり、毎日だったものが週に三日になり、二日になり一日になり、やがて萌々からあまりにしつこく体の関係を迫られることに嫌気がさしたのか、和之は寝室も別々にして夜の営みを完全に拒むようになったのだ。結婚生活が始まって僅か二か月足らずでセックスレスに陥ってしまった萌々は、その若い体に滾る欲情をどう処理すれば良いか分からなくななり、悶々とした日々を過ごすようになった。萌々は結婚を機に会社を辞めて専業主婦になつたため、昼間は何もすることがなく、胸の奥に渦巻く様々な感情のはけ口をどこにも見つけることができなかった。そして、和之に對して抱いていた憧れの父性はいつか消えてなくなり、自分の事をちゃんとかまってく

くれない事に対する強い不満へと変わって  
いった。結婚生活が始まって僅か二か月で  
愈期に陥り、満たされない心と体をどうに  
するために、ついに出会い系アプリを使い  
気相手を探すようになった。母  
子家庭で母親から厳しく育てられた  
は人一倍道徳観というものを身につけて  
たため、浮気や不倫は絶対にしてはいけ  
とだと良く分かっていて。それなのに、  
しようにもなく疼く体が若妻の道徳観を  
いつの間にか躊躇うことなく許されぬ  
走らせていたのだ。ただ、面倒なこと  
けたかったの、アプリで知り合った男  
はあくまでも体だけの関係にとどめ、  
上深入りはしないようにしていた。それ  
手も同意の上で、お互いに決して本気  
らない禁断の関係を楽しんでいたのだ。

そんな男達との性的な戯れを、最初の頃はホテルの部屋でいそしんでいた萌々だったが、いつからか妙な罪悪感が芽生え、それから自宅マンションに男を呼んで戯れるようになった。夫と暮らす家に男を呼んで性行為に興じる方がよっぽど罪なことのようにも思えるが、萌々にはむしろその方が罪悪感を感じなかった。それは自分のことをかまってくれない夫に対する当てつけであり、悪いのはすべて夫なのだ。と決めつけていたからだ。夫の和之は萌々のそうした不貞行為に全く気付いていなかった。普段から仕事に忙しかつ家に帰るのも毎晩深夜近い和之には、妻の異変に気付く余裕すらないというのが正直なところかも知れなかった。仕事に忙殺される四十七歳の夫とアプリで知り合った男と禁断の行為に興じる二十四歳の妻、年の離れた新婚夫婦のすれ違い生活は

月日が流れるにつれてますます二人の心を遠ざけていこうとしていた。而して、偽りの新婚生活が始まって半年以上が過ぎ、季節は暑い夏を迎えようとしている。た。日々汗ばむような暑さのせいか、若妻はますます欲情を募らせ、アプリで知り合った男を平日は毎日自宅マンションに呼んで、寝室のベッドやリビングのソファの上で裸になつて戯れ合つていた。そんなある時、リビングのソファの上で戯れていると、相手の男がいきなり萌々の体を抱え上げ、傍にある窓を開けてベランダへと連れだしたのだった。―いやあん、なにするつもり？―裸のままベランダへと出た萌々は驚いた様子で男に問い掛けた。―外の方が刺激的だろ―男はそう言つて笑うと、萌々を四つん這いさせ、後ろからイチモツを秘部に挿入してそのままピストン運動し始めた。

「ああん、ああん」  
若妻の厭らしいメスの鳴き声がベランダに響  
き渡り、その声はだんだん大きくなっていつ  
た。  
結婚するまで性行為には控えめな方だった  
萌々は今まで野外でセックスをした経験など  
一度もなく、ベランダでするそれはとても新  
鮮で刺激的であった。  
「ああん、気持ち良いわ・・ああん」  
萌々は初めて味わう快感にすぐに酔い痴れ、  
ここがマンションのベランダだということも  
忘れて悶え狂った。  
「あんまり大きな声出したら、ご近所さん達  
に聞こえてしまうぜ（笑）」  
男が背後から攻めながらそう笑いかけても、  
快感に溺れている萌々には全く聞こえておら  
ず、大きな喘ぎ声を放ち続けた。  
やがて、四つん這いのままメス犬のように  
悶え狂う萌々はついにその時を迎えた。



「ああん、もうダメえ、イクっイクっイクっ  
イクっイクっううう」  
ベランダに若妻の断末魔の喘ぎ声が響き渡る  
と、萌々は下半身を激しく痙攣させて、その  
ままベランダに突っ伏すように倒れ込んだ。  
その姿を見届けた男は満足そうな表情を浮  
かべると、萌々を一人ベランダに残したまま  
部屋の中に戻り、用が済んだかのようにサッ  
サと帰っていったのだった。